

民間教育研究運動とこよなく愛した反骨の学者

—— 山住正巳さんのご逝去を悼む ——

佐々木 享

2月1日に山住正巳さんが逝去されたとの残念な報に接した。山住さんは多方面に活躍し、著作も多く、晩年には東京都立大学総長を務めた立派な人として知られるが、ここでは、わたくしたち民間教育研究運動に参加している者から見た思い出を記しておきたい。

山住さんは、自由な精神にあふれ、反骨精神に徹した研究者だった。とくに日の丸、君が代問題、教科書検定問題、教育勅語などに関して展開された民主主義を語る論陣は、しっかりした研究に裏付けられており、山住さんの真骨頂だった。

山住さんは、民間教育研究運動をこよなく愛し、大事にした。著作も多く、第一級の学問研究の仕事をしておられたが、わたくしの知る限り主たる活動の場は教科研（教育科学研究会）を初めとする民間教育研究運動だと心に決めておられたように思われる。実際、常任委員会など教科研の活動には、都立大学総長が激務で出席不可能となるまで、長い間よほどのことがない限り欠席されたことはなかった。また早くから日教組の講師団にくわり、また日教組が委嘱したいくつかの研究会で、つねに教職員組合運動と民間教育研究運動とを結ぶ重要な役割を果たされた。とくに1970年代半ばに活動した中央教育課程検討委員会では、山住さんの肝いりで、主張が違うとして日頃は疎遠な各教科領域の数多くの民間教育研究団体の人びとが専門委員として呼び集められ、真摯な討論を重ねたことが思い出される（『教育課程改革試案』1976年、一ツ橋書房、参照）。同様のことは、山住さんが会長を務めた1980年代末の教育課程検討委員会でも見られた。

山住さんは、教育思想など教育全般の問題（のみ）を語る人が多い教育研究者の中では、個々の教科の研究を大事に扱い、教育課程の問題にも深い関心をもった異色の人であった。その姿勢は、教科研だけでなく、「音楽教育の会」にも積極的に参加されていたことにも現れていた。1960年代の教科研運動にはこうした山住さんの主張が大きく影響していたので、この傾向に疑問をもった一部の人たちからは、教科研は教科の研究会なのかと揶揄（やゆ）されたことさえあった。東京都立大学の教員になってからも一貫していたようで、山住さんの教えを受けた人たちの中から、梅原利夫さんなど、教科の教育や教育課程問題を研究する人たちが何人も育ったことはその何よりの証左といえよう。

最後に、個人的な思い出を記す。わたくしが1960年代の初めに教科研運動に参加し始めた頃、常任委員中の現場教師はわたくしを含むほんの2、3人に過ぎず、多くは大学に籍を置く研究者だった。そんな中でわたくしは、差別的に扱われたわけではなかったにせよ、その厳しい討論に参加するには気後れしていた。そんな時に「教師も研究者なんだ」とつねに現場教師を励まし、大切にしてくれたのは決まって山住さんだった。

また毎年1月にふたき旅館で開かれた教科研の中間集会では、熱っぽい討論が続いた夜の日程が終わってから、大広間で大抵は朝方の3時ころまで、教育を語り、山住さんの指揮でたくさんの方々が歌ったことは忘れられない。最後は決まって国際学連の歌で、これが出ないことには、お開きにならなかった。山住さんはいつまでもお気持ちが若かった。

（技術教育研究会常任委員、前教科研常任委員）